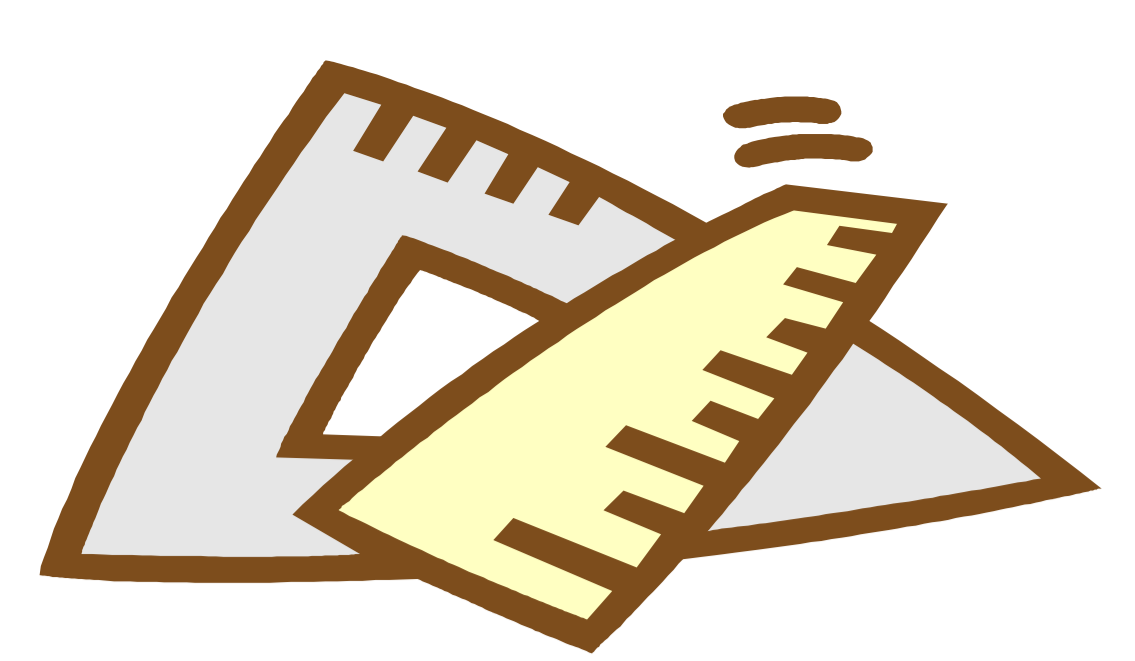


那須烏山市を事例とした 近代化遺産の教材化に関する一考察



足利工業大学 工学部 都市環境工学科
福島研究室(土木史研究室)
佐川 友斗

1 はじめに

平成10年度改正の「現行学習指導要領」(文部科学省)の社会科学習の目標として、“人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする”と定めている。この目標は、地域活性化方策の潮流である「地域の個性を活かしたまちづくり」とも呼応するものと思われる。そこで本研究では、2006年度から実施している那須烏山市の近代化遺産調査の成果を踏まえ、「教材化」という近代化遺産の新たな視点による活用について検討を行なった。

2 近代化遺産教材化の基本的な考え方

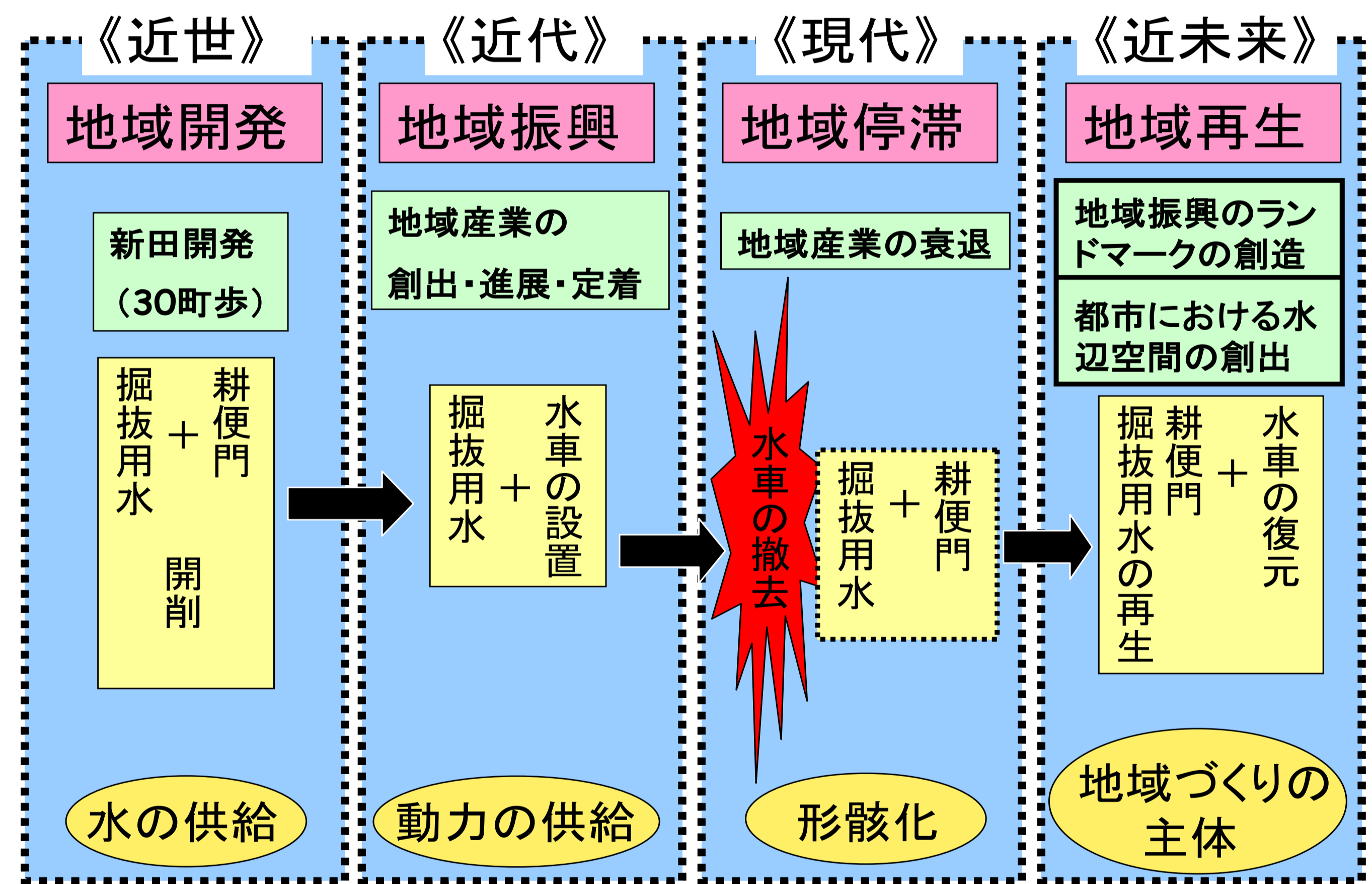
本研究では、小学生を対象に具体的な学習計画を検討する。この学習計画では、“地域への誇り”・“郷土愛”を育む一助となることを目標として、小学生が理解しやすい構成と内容とする。

3 那須烏山市における近代化遺産の「教材化」の検討

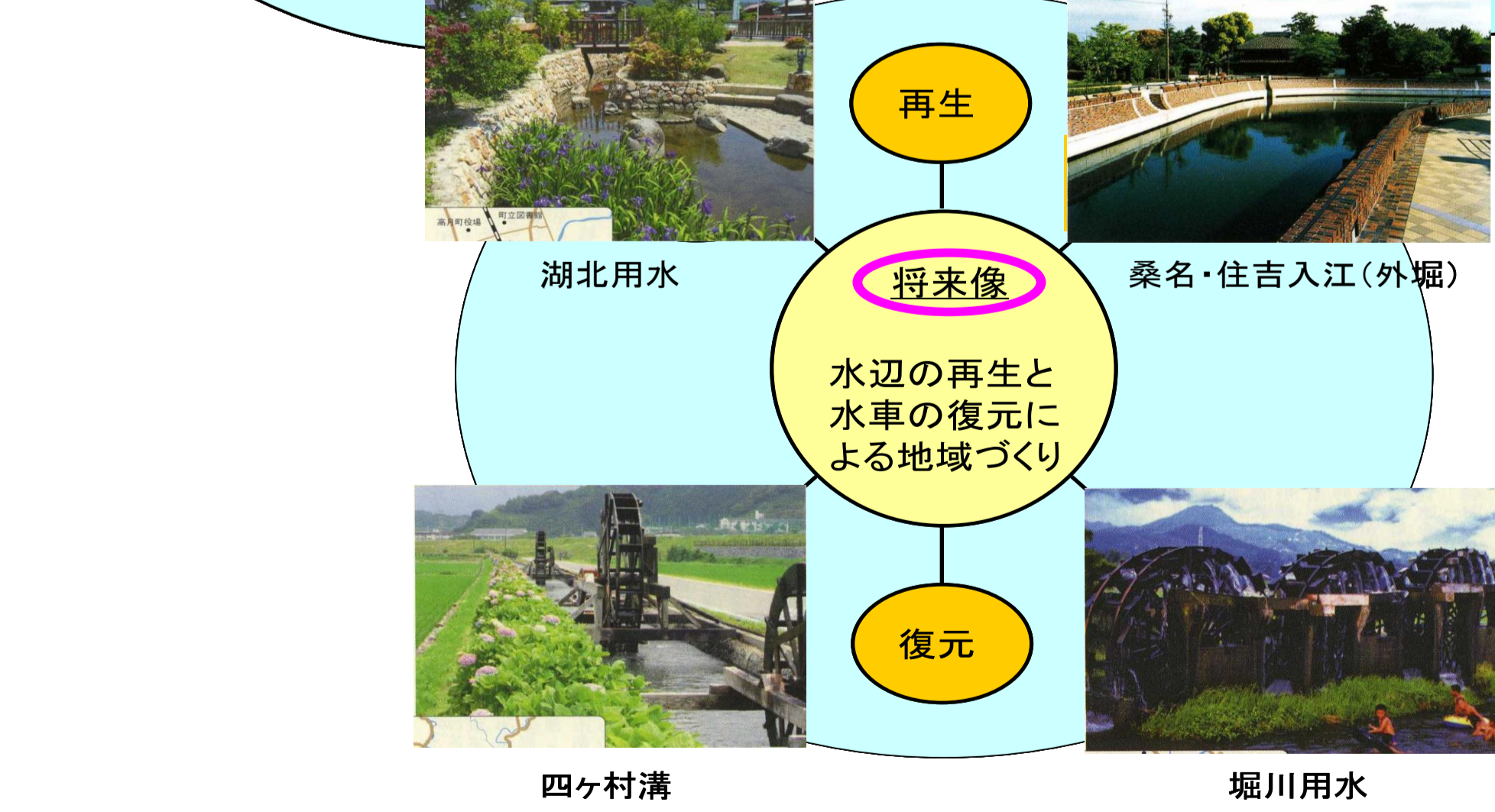
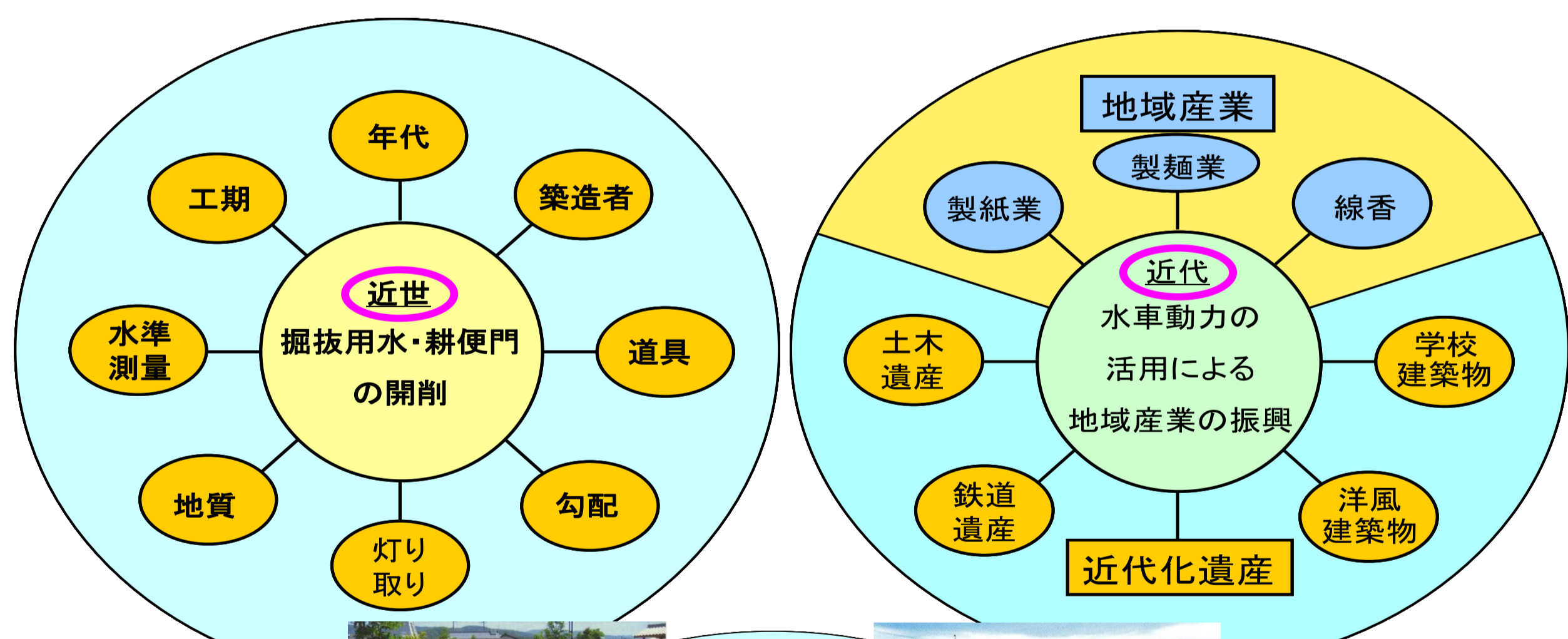
那須烏山市における教材化の具体案を「耕便門」を基軸として検討した。耕便門は、近世に築造された用水路であり、30町歩の新田が開発されるなど地域開発に大きく関わった。近代には、水車動力の導入により地域産業の発展を牽引した。昭和後期には地域産業の衰退とともに形骸化するが、地域づくりの主体となるポテンシャルを有している。耕便門を基軸とした学習の内容は、これまで蓄積してきた測量などの実地調査や文献調査・ヒアリングなどで把握した内容を基に計画する。

4 近代化遺産を取り入れたストーリーの提案

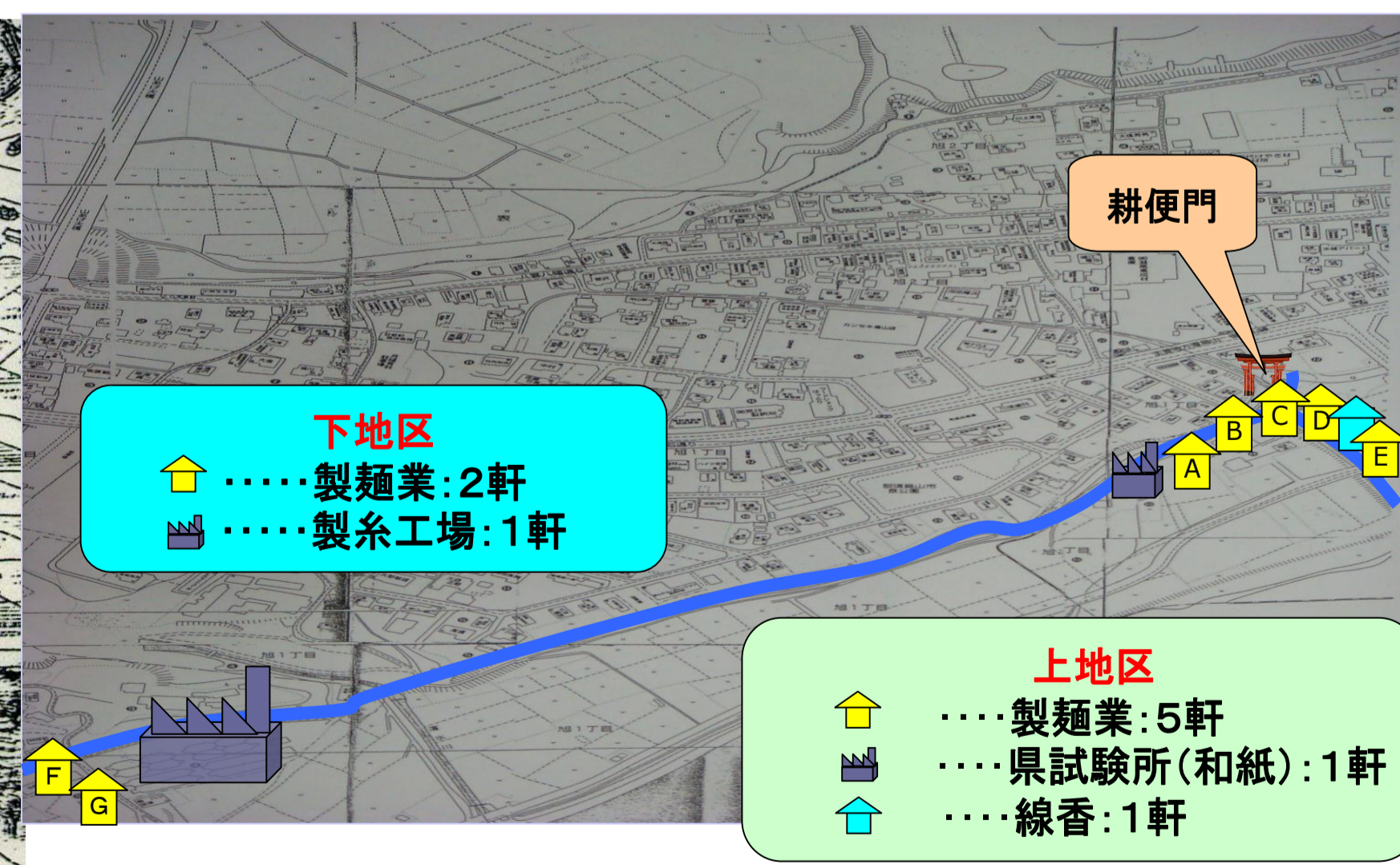
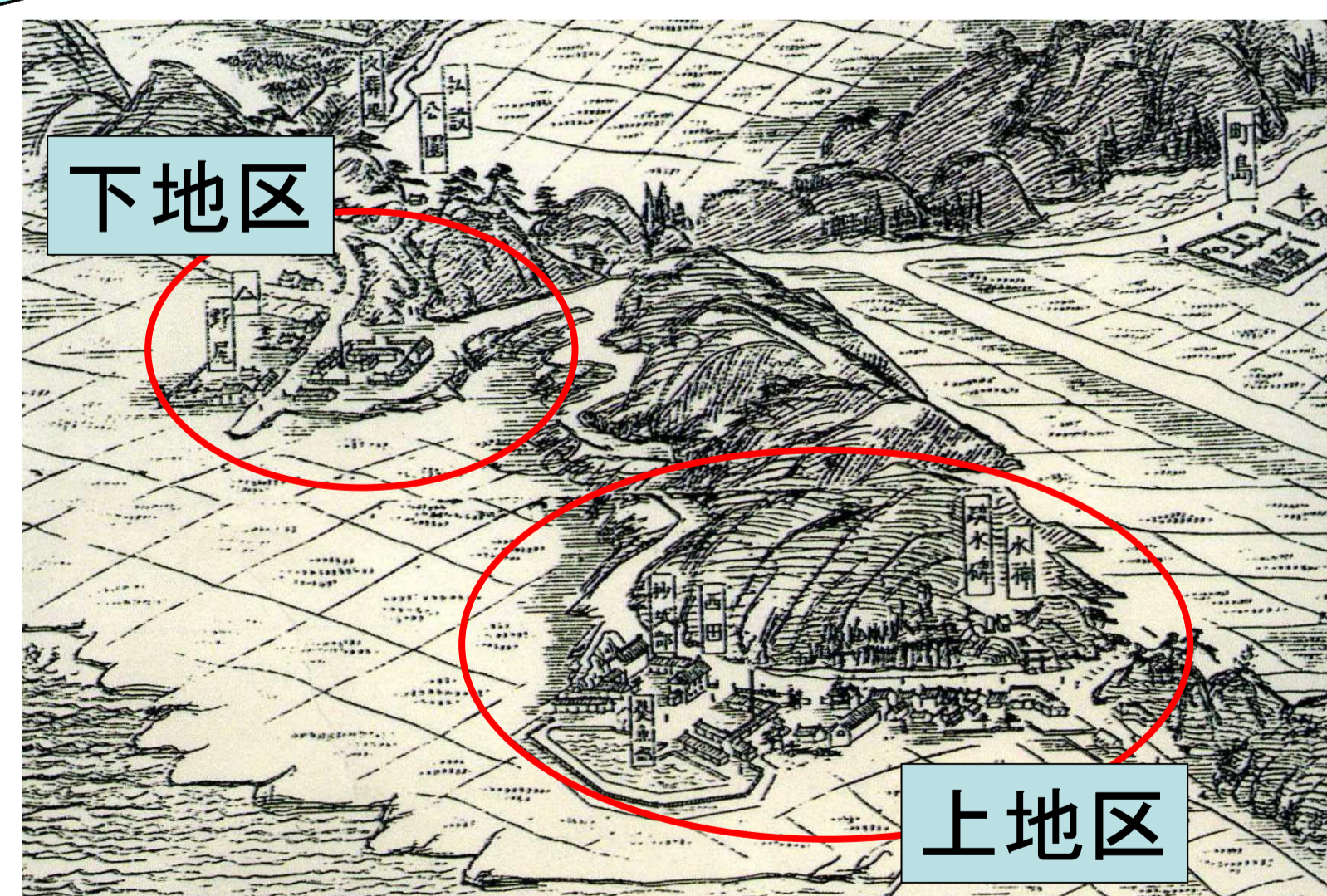
ストーリーの主旨は、耕便門を基軸として、近世における耕便門・掘抜用水の開削から近代における地域産業の振興、さらにこれからの地域再生に向けた耕便門の役割を主要な流れとする。さらに、時代におけるトピックスとして、近代化遺産を中心に工学分野の解説をとおして“ものづくり”の楽しさ、技術の面白さを感じてもらったこととした。このような構成・取り組みにより、“地域の歴史の理解”が媒体となり、『地域への誇り』『郷土愛』を育む一助となることがねらいである。また、工学を身近なものと感じる心の醸成を促す契機となることを期待している。



掘抜用水の趨勢の概念



学習内容のイメージ図



耕便門周辺の鳥瞰図(大正13年)と昭和10年当時の産業構成の配置

5 まとめ

- (1) 近代化遺産を基軸とした教材のストーリーを提案した。近代化遺産は、現代の基盤となった遺産であり、手に触れ記憶の残像も浮かぶ身近な文化財として地域史が明確に伝えられる遺産である。従って、地域史学習の教材として、有効であると考えられる。
- (2) 近代化遺産の教材化は、地域史の理解をとおして地域への誇り・郷土愛を育むとともに、次代を担う子供達の工学離れを低減させる一つのアプローチとして効果が期待できるものと考えている。